

電気羊の夢を見る

「ローレン、聞いてください。私はこの間、夢を見ました」

「夢？」

ローレンは片眉を吊り上げ、訝しむように平賀を見た。

バチカン情報局に努めるローレン・デイルーカの独房で、平賀とローレンはいつものように天使と悪魔のゲームを楽しんでいた。平賀は、話をつづける。

「私はその夢の中で羊飼いの姿をしていました。彼がそう言ったからでしょうか。周りにはたくさんの羊たちの群れがあり、私はその中でどこまでも続く緑の平原を見ながら、穏

やかな気持ちでたたずんでいたのです。夢を見るのは生きている証拠ですよね？ だとしたら、私はやっぱり生きています！ あなたが以前言っていたように、機械仕掛けなどではなかったんです。ローレンはおかしな冗談が好きなんですな」

そういつてクスクスと笑う平賀神父の額を、ローレンは無情に人差し指でちよんとつつく。すると、どうだ。時が止まったように、平賀は動かなくなってしまった。二人の間にしんとした静寂が訪れた。ローレンは平賀の額に埋め込まれている静電容量方式のスイッチに触れ、機能をシャットダウンさせたの

だ。

人差し指の下で、平賀はゆっくりと目を閉じ、人形のように固まってしまった。ローレンは静かな独房でぼつりとつぶやいた。

「君はまた自分が機械仕掛けであるということとを忘れてしまったようだな」

ローレンは席を立ち、平賀の横へ来た。

「私が君を作ったのは、ただゲームの相手が欲しかったからだ。君を生きた人間にしたいわけではない。そんなことをしたら……」

そこまで言いかけ、ローレンは平賀の形をしているそれを持ち上げ、ゆっくりとソファに横たえた。平賀はローレン一人の力で持ち上

げられるくらい、軽くできている。

——ことの発端は数か月前にさかのぼった。

その時担当していた奇跡調査で、ロベルトと平賀は大規模な土砂崩れに遭遇した。その時、ロベルト神父は奇跡的に一命をとりとめたが、平賀神父は助からなかった。そのときサウロ大司教はこう語った。

「あの時のロベルトは見ていられなかった。

彼は病室で目覚めるや否や、まっさきに平賀神父のことを、枕もとにいた私に聞いてきたよ。平賀神父がむごい死に方をしてしまったのではないか、ひよっとしてもう葬儀を済ませてしまい、僕だけが真実を知らないまま

でいるのか、とね。彼に真実を告げなければならぬ、と頭ではわかってはいたが、いざ直面したら、言葉が出なかつた。そのとき、私は罪深くも、彼に嘘をついてしまったのだ……今はまだ会えないだけで、きつと心配はない、と。」

「ほう、それで？」淡々とローレンが続ける。「平賀神父は、バチカンにとつてもまことに失い難い人物なのは君も承知しているだろう？」

その瞬間、ローレンはサウロ大司教が言おうとしていることを悟つた。

「……それで、何になる？悪趣味だよ。いいか

い？それをやつたと仮定して、この先に起こることを今から言い当ててやろう。たとえらなら、クラインの壺だ。現実を受け入れられない彼がコピーの平賀を本当の平賀だと思いたがる。そしてどうにもならない現実と直面し、振出しに戻る。だがロベルトは彼のない世界を受け入れられず、再び彼は本当の平賀を求めのさ……外面をたどつていくとやがて内面にたどり着き、そしてまた外面へとたどり着いて永遠に同じところを周回し続ける。まさしくクラインの壺にとらわれたような悪夢が起ころうね」

「だが、これは、どうしても必要なことなのだ

……彼を壊れさせないためには。失かれもまた失い難い人材なのだ。どうか、わかってくれ。君の頭脳もまた、神の恩寵であろう」

「ふん。神の使徒か。調子の良いことばかり言う。それはエゴではないのか？」

「時に、ローレン。君はゲームの相手がいないなることを惜しいとは思わないのかね？」

ローレンは言葉に詰まった。

「動機は君の好きなように決めてくれて構わない。結果が同じであれば、それでいいのだ……主のためでも、バチカンのためでも、ロベルトのためでもなく」

不服ながらも、ローレンは納得し、腹を決め、

「平賀」を作ることにした。

完成までに時間はそうかからなかった。

ローマ大学大学院の研究室にいたころに築き上げた人脈をたよりに、彼を構成するパーツ、情報、回路、制御システム、人格をつかさどるAIに至るまで徹底してそろえた。人体工学に基づいて人間らしくなるよう、設計図を引く。そして回路を構築する。つややかな黒髪と美しく弧を描いた睫毛、アーモンド形の瞳、日本人にしては色の白い皮膚と華奢な体。やわらかい唇。すべてが彼そのものだ。

我ながら震えた。不気味の谷などとうに超え

た先にある、完全な平賀・ヨゼフ・庚が冷たい鉄板の机の上に眠っていた。

ロベルトはその日、平賀が退院したという知らせを聞き、退院祝いにとささやかな宴を開く準備をしていた。キッチンで様々な料理を作っていると、インターホンがなる。

「お邪魔します、ロベルト神父」

「やあ、時間通りだね。今ちようど、チキンのグリルが焼けたところだよ。奥のリビングで遠慮なくくつろいでくれ」

平賀と会うのは数週間ぶりだった。歓喜に胸が高鳴る。

「僕は君が入院している間、ほんとうに心配していたんだよ。一度も会うことができなかったんだからね」

「ご心配をおかけしてすみません。私はこの通り、元気です」

平賀は、かわいらしくガッツポーズとり、明るく微笑んで見せた。ロベルトはそれを見て安心した。

いつも通りの日常。いつも通りの会話。すべてが滞りなく進んでいったが、平賀の心にはひとつの大きな秘密があった。それは、自分が人間ではないということ。それだけは、絶対に口外するなとローレンからきつく言わ

れていた。

平賀はローレンの命令を素直に受け入れ、ロベルトには内緒にしておくことにしていた。それから何日かは、事故にあう前と同じように、いつも通り聖徒の座へ出勤し、世界中から寄せられる様々な奇跡を調査する忙しい日々を送っていた。

しかし悲劇のほころびは、ある日突然やってくる。

ロベルトが礼拝堂で夕べの祈りをささげていたときだ。

ふと見とる、となりに平賀神父が並んでいる。

最近はずっと平賀とゆっくり過ごす時間が取れていなかったことを思い出したロベルトは、彼をダイナーに誘うことにした。

「平賀、このあとゆっくりダイナーでもいいかないか？ 行きたい店があるんだ」

「ええ、喜んで」

その店はバチカンから少し離れたローマの市街地にある、小さなレストランだった。

「ロベルト神父はいつも美味しいレストランを見つけているのがお上手ですよ。いつも尊敬します。私も探してみなくては、と思って探していたのですが、この前はいつの間にか古代中国のミイラについて調べふけていま

した……」

「フフ。誰にだって得意なことや不得意なこととはあるよ。君は僕ができない部分をうまくこと補ってくれるじゃないか。」

「それもそうでした。ところでロベルト神父?……」

「なんだい?」

ロベルトは、平賀の回答を待ったが、彼はいつまでたっても答えない。

様子がおかしい。ふと彼の顔を見ると、ぼんやりとして眠たそうな目をしていた。

「疲れているようだね。今日はそろそろ帰るか?」

「はい……」

平賀はスローモーションのようにゆっくりと、立ち上がった。ひどく疲れているのだからか。いつもなら、彼は突然倒れる。ロベルトは最初、そうした平賀の「限界まで動いて突然力尽きる」癖に驚いたが、長年付き合っていていくうちに慣れていた。しかし、今回は、今までのそれとは何かが違う。

嫌に重く、しんどそうなのだ。

ロベルトは平賀の体調が心配になり、提案した。

「僕の家で休んでいくかい?」

「大丈夫ですよ」



「でも、やけにだるそうじゃないか。ここからでは君の家まで少し歩くだろう？　遠慮なく頼ってくれ」

「では、お言葉に甘えて……」

そういつて、平賀はロベルト神父に半ば抱きかかえられるようにしながら、彼の家にとどり着いた。

リビングにつくと、平賀は倒れるようにしてロベルトのベッドで眠ってしまった。

しずかに眠っているように見える平賀のもとへ、ロベルトはそっと近づいた。

不安でたまらない。眠っている姿が、まるで、人形のようなだからだ。

僕の知っている平賀は、こんなに生氣がなく、生きている血のぬくもりが感じられない顔をしていただろうか？　彼は、本当に、生きて、いるのか？

土砂崩れにあつたあの日のことがロベルトの脳裏で鮮やかに蘇った。

ロベルトは、いくつもの夜で、彼が今までそうしてきたように、平賀の心音を確かめようとした……あたりはしんと静まり返っている。彼の胸に耳を当てる。……聞こえない。おかしい。もう一度よく聞く……やはり聞こえてこない。とくとくと脈打つ心音が。代わりに、ジリジリと何かが巻き取られていくよう

な音が聞こえる。…これは悪夢だ。

ロベルトは、嫌な考えを消すように頭を振り、その日はもう寝付くことにした。

翌日。起きてみる。隣で平賀はすやすやと寝息を立てていた。彼を起こす。

「おや、ロベルト。私はいつの間にか眠ってしまっていたのですね。ベッドを占拠してしまってますみません。」そう言って平賀は、慌ててベッドから抜け出そうとした、その瞬間。ガツシャーン。

金属が飛び散るようなけたたましい音を立てて、彼が床に崩れ落ちた。

おかしい。銀食器などを近くに置いていた記

憶はない。この部屋にそんな金属質な音を立って落下するようなものなど一つもないのだ。

ロベルトは薄々感じていた違和感の輪郭がはつきりと形をとって現れたように感じた。見ると、平賀はベッドのわきで妙な具合に体をのけぞらせ、腰を折る形で倒れている。その腹部。少しはだけたシャツの隙間から、薄目を開けたように除く無機質な金属が光っているのをロベルトの目がとらえた。

人間のそれとは似ても似つかない機械部品の断片である。

「平賀……」

息をのんで、平賀を見下ろすと、彼は観念した様子であきらめの笑みを浮かべながらこう言った。

「充電するのを忘れていました。…ばれてしまいましたね」

まだ悪夢の中だったのだ。

「やはり君は、機械仕掛けだったのかい……」

「そのようです」

「本当に？」

なおも問い詰めるロベルトに、何を言っているのでしょうか？と呆けた顔で上半身だけ起こした平賀はロベルトの顔をじっと見ていた。

すると、ロベルトは平賀の下半身を両手で支えるようにつかみ、ゆっくりと上半身から切り離れた。切り離れられていく接合部分から、バラバラと歯車や部品の類が、散らばり落ちる。ベアリング、ローター、筒車、アンクル、コード、オートマ受、交換回路といったことまごまとした部品である。

平賀は驚いてロベルトを制しようとした。

「ロベルト、やめてください！ そんなことしたら、元に戻せなくなってしまうです」

「かまわないさ」

ロベルトはなおも下半身を引っ張り、完全に引き離してしまった。

上半身だけになった平賀の着ている白いシャツの隙間から、背骨に相当する金属製の支柱が途中で切断された形で覗いている。また、肋骨の内側には、様々な器官を思わせる部品が内蔵されていた。

「痛くなかったかい？」

「痛覚はありません」

平賀は冷静に言う。

「僕は生きているからね。痛覚がない、ということはどういうことなのか想像しにくいんだけど」

平賀は一瞬だけ宙を見て「そうですね」と考えに耽り、再び口を開いた。

「触られた感触はわかるのですが、痛みは特に感じないように設計してあります。ローレンがそれは必要ない、と言っていました。ただ、内部の機器に異常が発生したとき、それをいち早く感知するために、触覚のような機能が備えてあるだけです。」

「へえそうなのかい。やはり彼は合理主義だな」

ロベルトは皮肉に笑った。

「ところで平賀、これは……？」と言って、ロベルトは中心から出ている背骨の部分に触ろうとして、平賀が慌てて制止した。

「あ、じかに触らないでください。錆止めが塗

装してあります。じかに触ると金属が急速に劣化してしまいますし、感電の危険もあります。ゴム手袋などで手を保護した方が良いでしょう」と

ゴム手袋で、きいて手術するとき、医者が薄いゴム手袋をはめている様子を思い出した。内部に触れるとき、菌などが入らないようにする……そう思うと、彼はまるで生きている人間のようだと言われた。ロベルトは思った。

繊細な部品が無数に収納されている内部……これから尊いものに触れる。

そう思うと、罪悪感にかられた。と、同時に、抑えきれないリビドーを感じた。

ロベルトはゴム手袋をとってくる間、一度、冷静になろうとして深呼吸をした。

今日の前にいる平賀は、平賀じゃない。なのに、どうしてだ。どこからどうみても、平賀そのものだ。機械仕掛けなのは、見せかけだけで、本当は生きているのではないか……？

思考が汚濁する。もうどうだっていい。今からそれを証明すればいいのだから。

ロベルトは、途中で切断された背骨部分に人差し指でそっと触れた。

「これは？」

「それは、支柱ですね。体重を支えると同時に配線の束が内部に収納されていて、すべての

機関から伝えられる情報を総括・再分配しています」

ロベルトは切断された背骨を一段ずつ指先でたどってゆく。垂れ下がったカーテンのように内部を中途半端に隠しているシャツの裾をまくると、無数の細かいパーツや歯車が動作し、赤や緑色のランプが点滅している様子がかがえた。ロベルトはそれを見て生命が脈動しているようだと感じた。支柱を頭部側へ向かうようにたどっていくと、カツンと硬い球場の部品に行き当たる。それを、そつと右手で包みこんだ。

「このパーツはなんだい？」

「炉です。そうですね……胃にあたる部分でしようか。食物を燃焼して動力源の一部に変えています。あなたはいつも美味しい手料理を作ってくれますよね。それでローレンが人と同じように食べ物を食べられるようにと、付けて頂いた機能なのですよ」

そういうと平賀は天使のように微笑んだ。

ロベルトは複雑な気持ちになった。大天才のあのローレン殿の、はからいだと？

「神への冒涇だ」

ロベルトは暗くうつむく。

「それじゃあまるで君は人間のようじゃないか。人をお創りになったのは、神だ。神にしか